

二〇二四年度 光塩女子学院中等科【第三回】

国語入試問題

二〇二四年二月四日（日）実施

《注意事項》

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙に、受験番号（漢数字・算用数字どちらでも可）と氏名を書きなさい。
- ③ 解答は、解答用紙に書きなさい。
- ④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高峰は病氣療養の旅で北海道の山地酪農に出会い、山で放牧するスタイルの牧場を始めた。牧場を始めて四年目、十五年も離れて暮らしていた息子の悠平が自分の意志で高峰の牧場へやって来た。悠平は野球部のエースだったが、相手チームのエースにテッドボールを投げてけがをさせたのをきつかけに心に深い傷を負い、家に引きもついていた。牧場に来てしばらくして、悠平は初めて牛の出産に立ち会う。母牛は難産の末に子牛を産んだが、立ち上がる事ができないでいた。

翌日も、母牛は立てなかつた。そうなると、不安はますます強くなる。森のところのような大規模牧場だったら、①蚊に刺され程度だろうが、高峰牧場にとつて、*アクシデントで成牛を一頭失うのはけつこうな(あ)痛手となる。

②悠平のほうも不安を募らせていたが、こちらは、牧場経営者とは違い、もう少しセンチメンタルなものだったようだ。何度も牛舎に様子を見にいつては、気落ちした顔で帰ってくる。何回目かに、彼は言った。

「子供を母牛のところ连接到いつたら、どうだろう。自分の子供を前にしたら、起き上がるかもしれない」

「無駄だよ。物語じゃないんだから、そうはいかないさ。体力や機能が回復してれば、自然に立ち上がる。回復していなければ、何をやっても立ち上がれない」

悠平は不満そうな顔をした。

次の日も、また次の日も、母牛は立ち上がらなかつた。往診にやってきた晴子先生も、(い)ユウコウな治療法が見当たらぬといつたふうである。牛がへたりこんでいる一角には、*澱んだ空気が漂うようになった。

ここまでくれば、牧場経営者としては、最悪の(う)シタイへの覚悟を決め、冷静な計算もするようになる。知りあいの家畜商に電話を入れ、値段についての話をしたりもした。

③悠平のほうは、そうは簡単に割り切れない様子だ。高峰の顔を見ては、「もう少し待とう。明日は立つかもしれない」と訴える。

出産から一週間が過ぎ、そろそろ見切りを【】時だと考えていた頃だった。朝、まだ夢の中にいた。その眠りが、ドンという音で破られた。部屋のドアが強く叩かれている。

ドアが開いた。悠平が顔を突き入れ、声が飛んできた。

「起きてくれ。牛が立った！」

まだ頭の中に残っていた夢のかけらが消し飛んだ。ベッドから下りた。ズボンを穿いて、部屋を飛び出した。牛舎に走った。たしかに立ち上がっていた。まだ薄暗い牛舎の中で、昨夜までしゃがみこんでいたあの牛が、他の牛と同様、四本の脚で立っている。

次の瞬間、高峰の目は別なものをとらえた。牛舎の柱に子牛が繋がれていた。先日、生れた子牛だった。

「これは」

「最後のAだと思つてさ、子牛を連れてきたら、なんと立っちやつたんだ」悠平はBを弾ませた。

「奇跡つて、起こるもんだね」

「いや——」

奇跡なんかじゃない。時が過ぎて、傷が癒えたから、牛は立ち上がったのだ。それに、子牛を母親のそばに連れてくるのは褒められた行為ではない。酪農は、母子は別々に育てるのが原則なのである。母と子の間に情を通わせてはいけない。

しかし、表情を輝かせている息子を前にすると、そのことは言えない。

「おいおい、おまえ、大手柄だな」

悠平は子牛のところまで行つて、首筋を撫でている。④その時、あるアイデアが浮かんだ。悪くないアイデアだと思つた。

「悠平、ここまでのことをやつたんだ。続きもやつてみないか」

「続きつて」

「子牛をここに連れてきたのは、まあ、いいとして、このまま二頭いっしょに育てるわけにはいかない。以前に話したと思うけど、子供に与える乳を人間がもらうのが酪農だから、子牛は母牛から離して育てなきゃならないんだ。で、悠平、この子牛、おまえに預けるから、責任持つて育ててくれないか」

二つの目が、こちらを凝視した。口が閉ざされていたのは、わずかな時間だった。

「あ、ああ、いいよ」

戸惑いと高揚が入り混じったような声だった。

「エンジェルだつてエ？」

それを聞いた時は、大声が出てしまった。悠平が子牛に名前をつけた。「エンジェル」だという。だが、なぜ、牛の名前が「天使」になるのか。

「ちよつと見てごらんよ、こいつ、背中に羽があるんだ」

悠平が子牛の背中を指で示した。驚いて、その部分を見た。むろん、翼が生えているわけではなかった。

「この模様、羽みたいだろ」

子牛の背中は白い毛に覆われているが、背骨を挟んで二つ黒い毛が貼りついていて、それが天使の羽のように見えると、悠平は言うのだ。たしかに、そう見えなくもない――。

「神様の使いが牛に姿を変えたのかい」

苦笑して、高峰は言った。悠平は真顔で応えた。

「こいつは奇跡を起こした牛なんだよ。母親を立てるようにした」

違ふ。あれは偶然で、傷が癒えたから立ち上がっただけなんだ。⑤言おうとして、言葉を飲み込んだ。牛に「エンジェル」なんて名前をつける相手に言っても、話が噛み合わないだけという気がした。

⑥乳牛は犬猫とは違ふ。人の役に立たなくなれば、処分される運命だから、ふつう名前はつけない。つけたとしても、ペットのようない愛らしい名前ではない。情が移れば、別れが辛くなる。責任を持って育てることと、感情移入して可愛がることとは別だ。

犬か猫みたいな名前をつけただけに、悠平は子牛をペットみたいに可愛がった。餌を忘れずにやることは当然として、糞に汚れた体を水洗いし、熱心にブラシもかけた。若牛（え）センヨウに区切られた放牧場にも連れ出し、運動をさせた。「エンジェル」のそばにいる時には、何やらしきりに話しかけてもいた。

来年には成人するという年齢で、背も自分より十センチは高いのに、これではまるで中学生じゃないか。いささか調子が狂った。一方で、牛の世話をすることに責任を持たせようという目論見は上手くいった。子牛に餌をやるためには、毎朝、必ず起き出す必要がある。当然、他の牛の世話もすることになる。⑦「出産事件」を経験して、気まぐれでは失われてしまう生命の脆さと尊さを知ったのかもしれない。

(本岡類『夏の魔法』による)

※注 森：大規模牧場の経営者。 アクシデント：思いがけない出来事。 事故。 災難。

センチメンタル：感じやすく、涙もろいさま。 感傷的。 真顔：まじめな顔。 目論見：計画。 心づもり。

問一 次の各設問に答えなさい。

(1) (あ) (え) のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

(あ) 痛手 (い) ユウコウ (う) ジタイ (え) センヨウ

(2) 本文中の[A]・[B]に入れるのに最もふさわしいものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。(同じものを二度使うことはできません)

ア 耳 イ 口 ウ 手 エ 声 オ 腹

(3) 「見切りを【一】の【一】に入れるのに最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
ア かける イ つける ウ とめる エ きめる

問二 ①「蚊に刺された程度」とありますが、大規模牧場では成牛を一頭失うことが、どのような程度であることを意味しているのですか。簡潔に答えなさい。

問三 ②「悠平のほうも不安を募らせていたが、こちらは、牧場経営者とは違い、もう少しセンチメンタルなものだったようだ」について、各設問に答えなさい。

(1) 「牧場経営者」とは誰のことですか。本文中の言葉で答えなさい。

(2) 悠平の「不安」とはどのようなものですか。「牧場経営者」の「不安」と対比させて説明しなさい。

問四 ③「悠平のほうは、そうは簡単に割り切れない様子だ」とありますが、この時の悠平の心情を説明したものとしてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子牛を母牛のそばに連れていくという思いつきをあきらめきれない心情。

イ 母牛がこのまま立てずじまいで家畜商に売られることに納得できない心情。

ウ 子牛が母牛とひき離されて、別の牧場に移されることに耐えられない心情。

エ 母牛が子牛を産んで立てなくなってしまふ状況を受け入れられない心情。

問五 — ④「その時、あるアイデアが浮かんだ」とありますが、誰のどのようなアイデアですか。簡潔に答えなさい。

問六 — ⑤「言おうとして、言葉を飲み込んだ」とありますが、そのことについて説明した次の文章の①・②にあてはまる漢字二字の言葉をそれぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

・子牛を連れてきたタイミングと母牛が立てるようになったタイミングが一致したのは、ただの①だと高峰は考えている。しかし、子牛に「エンジェル」と名づけ、②を信じている相手に自分の考えを言っても理解されないと思つて、言うのをやめた。

問七 — ⑥「乳牛は犬猫とは違ふ」とありますが、乳牛について説明したものを次のア～オからすべて選び、記号で答えなさい。

ア 人間の食生活の一部分を担っている。

イ 人間のペットとして可愛がられる。

ウ ふつうは名前をつけないし、つけてもかわいい名前はつけない。

エ 人の役に立たなくなれば、処分されてしまう。

オ 人の役に立たなくても面倒をみてもらえる。

問八 「高峰」の人物像の説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 牛に愛情を持つてはいるが、経営者として感情に流されずに冷静な判断を下すことのできる人物。

イ 牛に愛情を持っていないわけではないが、牧場経営による利益を第一に考える欲深い人物。

ウ 牛に愛情をそそぎ、自分だけが牧場の牛たちを立派に育てられるという自信に満ちあふれた人物。

エ 牛は家畜であり、商売道具だと割り切つて考え、ペットに対するような愛情は一切持たない人物。

- 問九 本文の表現の特徴を述べた文としてふさわしくないものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。
- ア 比喩表現が使われていることによつて、説明や記述の内容がより強く印象づけられている。
 - イ 語り手かつ主人公である悠平の心中の言葉が書かれることで、物語の重厚さが増している。
 - ウ 会話文が多く使われていることによつて、登場人物の感情や性格がよりよく伝わってくる。
 - エ 高峰が過去を述べる回想部分があるところどころに差し挟まれることで、物語に奥行きが生まれる。
 - オ 悠平の様子が丁寧に描写されることによつて、その心情が想像しやすくなっている。

問十 — ⑦ 「『出産事件』」とありますが、「出産事件」を通して悠平の内面がどのように成長したと読み取れますか。三行以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「かわゆい」が変化した語である「かわいい」は、元々は「顔映ゆし」、つまり、顔が赤らむ、見るに忍びない、といった意味の言葉に由来し、^{*}中世以前は、小さい者や弱い者を不憫に思う心境を表す言葉として用いられていた。それが中世後半に至ると、同じく小さい者や弱い者に対する情愛の念や愛らしいと思う気持ちを示すようになり、次第に①この種の意味合いが（あ）ユウセイになっていく。そして、近世の後半以降は「不憫」の意味が次第に消失し、専ら「愛らしい」という類いの意味で用いられるようになった（日本国語大辞典 第二版）。「かわいい」は、いまや世界各国で通用する言葉になったが、そうした国際語としての「カワイイ (Kawaii, k a b a n . e t c .)」も小さなものの愛らしさのみを表す言葉として流通していると言えるだろう。

ただ、「かわいい」がいまは表立った仕方では「かわいそう」とか「不憫」といった意味で用いられることはないとしても、やはり、「かわいい」と「かわいそう」は深いところで結びついているように思われる。つまり、私たちが子どもを「かわいい」と思うとき、そこには、子どもをたんに愛らしく感じるだけでなく、子どもを憐れみ、胸を痛め、後ろめたく感じる、苦い感覚が入り交じっているのではないだろうか。

たとえば、自分の子に限らず、公園などで子どもたちが無邪気に遊んでいたたりするのを眺めると、平和で微笑ましい気持ちになると同時に、②いまここに生まれてきたこの子たちを祝福しなければならぬ、という感情が自分のなかに湧き起こってくる。

「君たちはこの世界に生まれてこない方がよかった」などという風に思い捨てるのは、あまりにみつともなく、無責任に思える。彼らは自分で「生んでくれ」と頼んだわけではない。勝手に投げ込まれた各々の場所での必死に生きる彼らのために、少しでもこの世界をましなものにする責任が私たち大人にはある。——この感覚は、たとえば「世代間倫理」という立派な言葉に仕立てて語ることもできるが、私にとってにはさしあたり、子どもたちへの③愛おしさと後ろめたさが緋い交ぜになった感情と切り離せない。

ところで、このように言葉の歴史を辿り、語源へと遡っていく営みは、哲学の（い）ギロンのなかでよく行われることだ。たとえば、「幸せとは何か」という問いを扱う際にはしばしば、④「しあわせ」という言葉が、「する」と「あわす」が結びついた動詞「しあわす（仕合わす、為合わす）」が名詞化してできたものである点に注目し、問いへの答えやヒントを探るという方法が採られることがある。

実際、「しあわせ」は元々、二つの事物がぴったり合った状態を指す言葉だった。そして、その状態は自分の意志や努力だけでは

実現せず、それを超えた働きに大きく左右されるものだという受けとめ方が、この言葉には込められてきた。それゆえ、かつてこの言葉は「めぐり合わせ」や「運」、「運命」、「なりゆき」、「機会」といったものを主に意味し、しかも、良いめぐり合わせにも悪いめぐり合わせにも用いられてきた。つまり、「幸運」以外にも、「不運」、「不幸」、「人が死ぬこと」、「葬式」といった意味すらもついていたのである（日本国語大辞典 第二版）。

とはいえ、「しあわせ」という言葉の意味は本当は、「めぐり合わせ」や「運命」といったものだ、というわけではない。時代が下り、現代に至ると、この言葉によって「めぐり合わせ」などを直接指すことはなくなり、不平や不満がなく心が満ち足りている状態としての「幸福」を主に指すものとなった。この変化はそれ自体として重要であり、なぜそのように意味が移り変わっていったのか、大いに（う）ケントウする価値があるだろう。

ただ、同時に、現代のそうした「しあわせ」の用法ないし「しあわせ」観では見えにくくなっているものが、この言葉の歴史を遡ることで見えてくる面があることも確かだ。「めぐり合わせ」の類いから「幸福」へと意味が移ろっていったのは、この⑤「二つの事柄に深い関連性があるからだ、というの自然で見込みの高い推定だろう。そして、この推定から、「しあわせ」についての新しい見方が開かれうる。あるいは、私たちが忘れがちだった見方が息を吹き返している。すなわち、「しあわせ」であるというのは、単に「心が満ち足りている状態」にある——幸福感を覚えている——という主観的な心持ちに尽きるわけではなく、誰かや何かとめぐり合い、自分の意志や努力を超えた働きに与る契機と深く結びついている、という見方だ。

こうした点で、言葉の歴史を遡ることはまさに、「⑥故きを温ねて新しきを知る」ことの最も身近な実践となりうるものだ。語源のみに事柄の本質を見ようとして、言葉の意味の時間的な変化を無視する姿勢——言うなれば「語源原理主義」——は間違っているが、かといって、いま現在表立っている用法のみに注目することも、一種の視野狭窄に陥っている。言葉の歴史を時間をかけて辿り直すことは、「しあわせ」であれ、あるいは「かわいい」であれ、普段滑らかにテンがよく言葉を使っているときには意識しない、これらの言葉の興味深い奥行きを確かめることになるはずだ。

そしてその作業は、⑦「いましあわせ」とされることとの向き合い方や、「かわいい」とされるものとの向き合い方について、私たちにいま一度考える機会を与え、ときに大きなヒントを与えてくれるだろう。

（古田徹也『いつもの言葉を哲学する』による）

※注 見るに忍びない：見ることにたえられない。

中世：時代区分の一つ。日本では鎌倉・室町時代を指す。

不憫：かわいそうなこと。あわれむべきこと。

近世：時代区分の一つ。日本では江戸時代を指す。

専ら：それだけ。そのことばかり。

世代間倫理：現代の世代は未来の世代がよい環境のもとで生きることに対する責任を負うとする考え。

狭習：すばまつてせまいこと。テンポ：速さ。

動詞：ことばの種類の一つ。

名詞：ことばの種類の一つ。

与る：関係する。かかわる。

契機：きっかけ。

語源原理主義：ことばの起源にこだわる考え方。

狭習：すばまつてせまいこと。

テンポ：速さ。

問一 次の各設問に答えなさい。

(1) (あ) く (う) のカタカナを漢字に直しなさい。

(あ) ユウセイ (い) ギロン (う) ケントウ

(2) 「消失」と同じ成り立ちの熟語を次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 進退 イ 登山 ウ 救助 エ 寒冷 オ 古書 カ 市立

問二 ①「この種の意味合い」とはどのようなものですか。本文中より三十字以内で抜き出して答えなさい。

問三 ②「いまここに生まれてきたこの子たちを祝福しなければならぬ、という感情」について、各設問に答えなさい。

(1) 「いまここに生まれてきたこの子たち」を別の言葉で言いかえた箇所を、本文中から二十五字以内で抜き出して、最初と最後の三字をそれぞれ書きなさい。

(2) 「祝福しなければならぬ」という表現についての説明が完成するよう、Xにあてはまる言葉を本文中より抜き出して答えなさい。

・この子たちが生まれてきたことを心から喜び、存在を愛おしく思うと同時に、この子たちが育ち行く先の世界をよりよいものにするXが自分たちにはあるのだという筆者の思いがよく表れている。

問四 — ③ 「愛おしさ」と後ろめたさが緬い交ぜになった感情」とはどのような感情ですか。これより前の本文中の言葉を用いて簡潔に答えなさい。

問五 — ④ 『しあわせ』という言葉」がどのようにしてできたかを図式にまとめると、次のようになります。

・「する」＋「あわす」↓「しあわす」↓「しあわせ」

同じようにしてできたと思われる言葉を、本文中より探して図式にまとめました。

I

・

II

にあてはまる言葉を書きなさい。

・「なる」＋「ゆく」↓ I ↓「なりゆき」

・ II ↓「合わせる」↓「めぐり合わせ」

問六 — ⑤ 「二つの事柄」とは何と何とを指しますか。答えなさい。

問七 — ⑥ 「故きを温ねて新しきを知る」について、各設問に答えなさい。

(1) これはある四字熟語を文として読めるようにしたものです。もとの四字熟語を答えなさい。

(2) ここではどのようなことを指して、「故きを温ねて新しきを知る」ことだと言っていますか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 「しあわせ」という言葉の歴史を遡っていくと、「幸福」はあとから加わった新しい意味だと理解できること。

イ 「しあわせ」という言葉の歴史を遡っていくと、「しあわせ」についての新しい見方が開かれること。

ウ 「しあわせ」という言葉の元の意味へと遡っていくと、「仕合わせ」の方が新しくできたものだとわかること。

エ 「しあわせ」という言葉の元の意味へと遡っていくと、「幸福」と似た意味の古い言葉に出会えること。

(3) 次の1～3は「故きを温ねて新しきを知る」のように、四字熟語を文として読めるようにしたものです。もとの四字熟語の意味をあとのア～カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 朝あしたに令めいして暮あしたれに改あらたむ
- 2 傍たなごらに人無なきが若ごとし
- 3 我わが田ゐに水みづを引く

- ア 人前ひとまへをはばかりず、勝手気ままにふるまうこと。
ウ その場その時に応じて適切な手段を用いること。
オ 方針が多すぎてどれを選んでよいか迷うこと。
イ 自分に都合つごうのよいように取りはからうこと。
エ 同じ結果になることに気がつかないこと。
カ 法はやきまりごとが次々に変わって定まらないこと。

問八

⑦「いま『しあわせ』とされることとの向き合い方や、『かわいい』とされるものとの向き合い方について、私たちに一度考える機会を与え、ときに大きなヒントを与えてくれるだろう」と、この本文は結ばれています。

本文を読んで、次のA・Bどちらかのテーマを選び、答えなさい。選んだテーマをA・Bの記号で解答欄に記すこと。

- A 「しあわせ」という言葉の歴史を遡さかのぼることで、あなたは『しあわせ』とされることとの向き合い方について、どのようなことを考えましたか。あなたが「しあわせ」であると感じた経験を挙げながら百字以内で書きなさい。
- B 「かわいい」という言葉の歴史を遡さかのぼることで、あなたは『かわいい』とされるものとの向き合い方について、どのようなことを考えましたか。あなたが「かわいい」と感じた経験を挙げながら百字以内で書きなさい。